

『過程の演習 新国語問題集』補足・解説・解答

19「あきぎり」

● 解釈のツール を示す。応用してくれたまへ。

【1】人物関係——前説まえせつと注をフルに使って人物関係をつかんでおく。

- ・ 姫君の母（尼上・亡くなる）、父君（すでに死別）、伯父（大殿）
- ・ 姫君の乳母（宰相）、その娘⇨侍女（少将）
- ・ 姫君の恋人（中将）

【2】鎌倉時代の擬古物語というヒント。センター問題集の『住吉物語』を思い起こそう。男が姫にアタックするけど、つれなくされてるうちに、姫の乳母が死んで、乳母の娘の侍女が男の姫の間を取り持つ話。どこか似てるでしょ。姫の身内が死ぬ。姫に言い寄る男。この原形は『源氏』の若紫。『源氏』の微妙な（そして、劣化した）バリエーションが延々作られたわけ。「死」と「恋」がセットで出てくることが多いが、これには本質的な理由がある。人は死ぬが、恋が芽生え、新しい生が宿る。万葉の部立ての中心が、挽歌ばんか（死）と相聞そうもん（恋・愛）だったことを想起せよ。

【3】引用の「と」。「まことに限り」とおぼえ給へば」のように、引用の「と」が出てきたら、とりあえず「を打って読む癖をつける」とい。

【4】指示後「さ」。指示内容を確かめながら読む。でも、パツとわからなければ、ほつといて進む。

【5】とりあえず直訳してから考える

【6】単語。ま、結局はこれ。慣用句的なものに注意。鍵になるものを挙げる。

- 1 ● 限り⇨「 」
- 2 ● かまへて＋命令⇨「 」 （～せよ）
- 2 ● もてなす⇨「 」 する
- 3 ● 見譲る⇨誰かに「 」を頼む
- 3 ● うしろめたし⇨「 」だ

3 ● 続けやり給はず↓続け・やら・ず⇨「 」 続けられない

4 ● せく⇨「 」

4 ● おろかなり⇨「 」だ

5 ● おのづから⇨自然に、「 」に、もしも

6 ● ものおぼゆ⇨「 」 がはつきりする

8 ● 心も心ならず⇨「 」が「 」でない

8 ● さてもあるべきことならねば⇨「 」でいるわけにもいかないの

8 ● 出で立ち⇨「 」 （への） 出発

9 ● しかるべきこと⇨そうなるはずの「 」

11 ● …ともよのつねなり ↓ といふもよのつねなり⇨といふも「 」 なり

12 ● ものなどのたまふ ↓ もの・いふ⇨「 」 「、気の利いたことを

言う、男女が心通わせる ※単語に割り込む「 」 助詞 もの▼など▲のたまふ

16 ● おくる「後る」⇨（誰かが死んで）あとに「 」

※おくらす ⇨（自分が死んで）あとに「 」

16 ● さこそ＋推量⇨「 」 くだろう

17 ● ご覧じだに入る ↓ 見・入る⇨「 」

※単語に割り込む副助詞 ご覧じ▼だに▲入る

問 1 傍線部エ・オ・キを現代語訳せよ。

エ 悲しとも、世の常なり↓「悲し」と（いふ）も世の常なり⇨「悲し」といふもおろかなり

悲しいなんていう言葉で表現しても、ありたきり（世の常）でいい足りない！
悲しいなんていう言葉で表現しても、いいかげん（おろか）でいい足りない！

オ やがて迎へ奉るべし。

・「やがて」の2意 そのまま、○すぐに

・誰を？

キ 御覧じだに入れねば

・「だに」

・誰が？ 何を？

問2 「なからむあとにも、かまへて軽々しからずもてなし奉れ」(傍線部ア)とは
 ということか、説明せよ。

▼直訳↓補い。「亡き後にも、必ず軽々しくなくお世話申し上げよ。」

・尼上が、宰相に、姫のことを頼んでいる、ということがわかるように説明する。

問3 「おはします時こそ、おのづから立ち去ることも侍らめ」(傍線部イ)を、主
 語を補って現代語訳せよ。

▼直訳↓補い。「いらつしやるときは、たまたま立ち去ることもありましようが。」

・こそ＋已然形…↓逆接

▼直訳してから、誰が？どこを？と考える

・敬語に注意 尊敬↓相手 丁寧↓自分

・尼君がいるときは、私(＝宰相)が姫君の元を立ち去る。

◎問4 「ただ同じさまにと」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。

▼じつは、この段落すべてを解釈せよ、という問題。ちよこつと聞いているだけのよ
 うに見えながら、結局全体を考えさせるといふ渋い問い。前段落の「同じさま」とは
 意味が違う、というひっかけもある。

▼姫の様子を表している箇所を拾う。尊敬の付くところ。「尼上」「大殿」は外して。

「姫君は、ウただ同じさまにと、こがれ給へども、かひなし。誰も心も心ならずなが
 ら、さてもあるべきことならねば、その御出で立ちし給ふにも、われさきにと絶え入
 り絶え入りし給ふを、「何事もしかるべき御ことこそましますらめ。消え果て給ひぬ
 るは、いかがせむ」とて、またこの君の御ありさまを嘆きあたり。大殿もやうやうに
 申し慰め給へども、生きたる人とも見え給はず。」

その箇所を直訳。▼引用の「と」に注意。

- ・ただ同じさまにと、こがる＝「全く同じ様に」と焦がれる
- ・われさきにと絶え入り絶え入りし給ふ＝「我先に」と死にそうにする
- ・この君の御ありさま＝姫君の様子
- ・生きたる人とも見え給はず＝生きている人と思えない

↓姫君が、「**自分も死にたい**」と思っていることを見抜く。「同じように・死にたい」
 「自分が先に・死にたい」。もう生気が失われている。
 ※誰かが死んだら後を追いたい、というのは、古典でよく出てくる心情。親子、恋人、
 主君と家来…。

◎問5 「鳥辺野の夜半の煙に立ちおくれさこそは君が悲しかるらめ」(傍線部力)
 の和歌の大意をわかりやすく説明せよ。

▼和歌↓まず句読点(切れ目)を入れる。

「鳥辺野の夜半の煙に立ちおくれ、さこそは君が悲しかるらめ」

▼SVに注意し、「結論」を読む。

「君が／悲しかる／らむ」＝あなたは悲しいだろう。

▼比喩のいいかえ

「鳥辺野の夜半の煙」＝葬送の地鳥辺野で夜に遺体を焼く煙↓姫君の母が死んで焼か
 れて天に昇る

お母さんが死んでさぞ悲しいでしょう、という、ふつーの歌でした！

【冊子の解答例】

問1 エ＝悲しいという言葉では、(月並みすぎて)言い表せない
 オ＝すぐに姫君を迎え申し上げよう

キ＝姫君は中将の手紙を読みなさることさえできないので

問2 自分(尼上)の死後も宰相が姫君をしっかり世話をしてほしいということ。

問3 尼上が存命でいらつしやる時には、たまたま私が姫君のそばを離れることもあ
 るでしょうが

問4 姫君が母の尼上の後を追って死にたいということ。

問5 母の尼上に先立たれて、姫君はとても悲しんでいるだろうということ。

- 1 ● 限りⅡ臨終
 - 2 ● かまへてⅡ必ず（くせよ）
 - 2 ● もてなすⅡ世話する
 - 3 ● 見譲るⅡ誰かに世話を頼む
 - 3 ● うしろめたしⅡ気がかりだ
 - 3 ● 続けやり給はず↓続け・やら・ずⅡ最後まで続けられない
 - 4 ● せくⅡせき止める
 - 4 ● おろかなりⅡいいかげんだ
 - 5 ● おのづからⅡ自然に、偶然に、もしも
 - 6 ● ものおぼゆⅡ意識がはつきりする
 - 8 ● 心も心ならずⅡ気が気でない
 - 8 ● さてもあるべきことならねばⅡそのままにいるわけにもいかないので
 - 8 ● 出で立ちⅡ（あの世への）出発
 - 9 ● しかるべきことⅡそうなるはずの運命
 - 11 ● …ともよのつねなり ↓ といふもよのつねなりⅡといふも^いお^いろ^ない
 - 12 ● ものなどのたまふ ↓ もの・いふⅡ口に出す、気の利いたことを言う、男女が心通わせる
- ※単語に割り込む副助詞 もの▼など▲のたまふ
- 16 ● おくる「後る」Ⅱ（誰かが死んで）あとにのこる ※おくらすⅡあとにのこす
 - 16 ● さこそ+推量Ⅱさぞかしくだろう
 - 17 ● ご覧じだに入る ↓ 見・入るⅡ目を通す

※単語に割り込む副助詞 ご覧じ▼だに▲入る

〔6〕次の文章は、鎌倉時代成立とされる物語『あきぎり』の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。なお、本文中の「宰相」は姫君の「御乳母」と同一人物であり、「少将」はその娘で、姫君の侍女である。(東京大)

(尼上ハ)まことに限りとおぼえ給へば、御乳母を召して、「今は限りとおぼゆるに、この姫君のこのみ思ふを、アなからむあとにも、かまへて軽々しからずもてなし奉れ。今は宰相よりほかは、誰をか頼み給はむ。我なくなるとも、父君生きてましまさば、さりととも心安かるべきに、誰に見譲るともなくて、消えなむのちのうしろめたさ」を返す返すも続けやり給はず、御涙もとどめがたし。

まして宰相はせきかねたる気色にて、しばしものも申さず。ややためらひて、「いかでおろかなるべき。イおはします時こそ、おのづから立ち去ることも侍らめ、誰を頼みてか、かたときも世にながらへさせ給ふべき」とて、袖を顔に押し当てて、たへがたげなり。姫君は、ましてただ同じさまなるにも、かく嘆きをほのかに聞くにも、なほもののおぼゆるにやと、悲しさやらむかたなし。げにただ今は限りと思して、念仏高声に申し給ひて、眠り給ふにやと見るに、はや御息も絶えにけり。

姫君は、ウただ同じさまにと、こがれ給へども、かひなし。誰も心も心ならずながら、さてもあるべきことならねば、その御出で立ちし給ふにも、われさきにと絶え入り絶え入りし給ふを、「何事もしかるべき御ことこそましますらめ。消え果て給ひぬるは、いかがせむ」とて、またこの君の御ありさまを嘆きあたり。大殿もやうやうに申し慰め給へども、生きたる人とも見え給はず。

その夜、やがて阿弥陀の峰といふ所にをさめ奉る。むなしき煙と立ちのぼり給ひぬ。エ悲しとも、世の常なり。大殿は、こまごまものなどのたまへること、夢のやうにおぼえて、姫君の御心地、さこそとおしはかられて、御乳母を召して、「かまへて申し慰め奉れ。御忌み離れなば、オやがて迎へ奉るべし。心ぼそからでおはしませ」など、頼もしげにのたまひおき、帰り給ひぬ。

中将は、かくと聞き給ひて、姫君の御嘆き思ひやり、心苦しくて、鳥辺野の草とも、さこそ思し嘆くらめと、あはれなり。夜な夜なの通ひ路も、今はあるまじきにやと思すぞ、いづれの御嘆きにも劣らざりける。少将のもとまで、

カ鳥辺野の夜半の煙に立ちおくれさこそは君が悲しかるらめ

- 7 -

とあれども、キ御覧じだに入れねば、かひなくてうち置きたり。

〔注〕 ○御出で立ち——葬送の準備。

○しかるべき御こと——前世からの因縁。

○阿弥陀の峰——現在の京都市東山区にある阿弥陀ヶ峰。古くは、広くこの

一帯を鳥辺野と呼び、葬送の地であった。

○御忌み離れなば——喪が明けたら。

○中将——姫君のもとにひそかに通っている男性。

問1 傍線部エ・オ・キを現代語訳せよ。

エ「 「 「

オ「 「 「

キ「 「 「

問2 「なからむあとにも、かまへて軽々しからずもてなし奉れ」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。

〔目安〕30字

問3 「おはします時こそ、おのづから立ち去ることも侍らめ」(傍線部イ)を、主語を補って現代語訳せよ。

◎問4 「ただ同じさまにと」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。

〔目安〕30字

◎問5 「鳥辺野の夜半の煙に立ちおくれさこそは君が悲しかるらめ」(傍線部カ)の和歌の大意をわかりやすく説明せよ。

〔目安〕30字